

「比良山古人靈託」と善念・性信

坂 東 性 純

一

松尾の慶政上人(一一八九—一二六八)の筆録と伝えられる「比良山古人靈託」と題する書き物はこれまで慶政上人の伝記や著作の研究と相俟って、諸学者の間で、いろいろな角度から論じられてきたが、殊にこの中で法然(一一三三—一二二二)・善念(一二〇一—一二八五)・性信(一一八七—一二七五)の名が明恵房(高辨・一一七三—一二三三)・解脱房(貞慶・一一五五—一二二三)等と並んで現われる箇所は注目に値する。榎田博士頌寿記念の論集中で、永井義憲氏はこの件りを取り上げて問題を提起されている。^①ここに現われる善念・性信が親鸞(一一七三—一二六二)門下の兩人を指すものとすれば、この「靈託」は真宗史の上でこれまで知られ

なかった新たな事実、すなわち、この両者が京都においても布教活動に従事したのではないかという蓋然性を示す一つのヒントたりうるのではないかとも思われる。この書き物はこれまで史学者や国文学者によって屢々論じられてきたが、未だに真宗史家の広く注目するところとなっていないように思われるので、ここでは「比良山古人靈託」と題する筆録の概要と筆者慶政上人について、これまでに諸学者によって確かめられたところを記し、本書と善念・性信らとの連がりに関し二、三の角度から卑見を述べてみたい。この靈託は、延応元年(一二三九)五月、九条道家(一一九三—一二五二)の病氣平癒の祈禱の際、比良山古人と称する靈と、その祈禱に当った実兄の慶政との間に交わされた問答を記したもので、この問答は五十条ほどあり、この靈は

天狗といわれる。この天狗の依憑したのは、当時九条家に仕えていたと思われる廿一歳の女性で、伊予法眼泰胤の女

・刑部権大輔家盛の妻であった。この書の一本は道家に、他の一本は將軍頼経(一二八一—一二五〇)に進覽された旨の
前書がある。原本、すなわち慶政の草稿本は、彼が創立した松尾の法華山寺に残されたと思われるが、存否は不明で、
五種類の写本(宮内庁書陵部本、猪熊信男氏旧蔵本、西田長男氏蔵本、及びこの同系本、高山寺蔵本)が知られている。

凡そ五十条にわたる問答の内容は、道家の病氣と修善の利益、天狗界の様子、および現世の人びとの未来の予言と、死者の後生冥界の消息から成っており、書陵部蔵本によれば問題の箇所は次のごとくである。

問。何意人來天狗道乎。又天狗通唐土乎。

答。僑慢心執着心深者、來此道也。又不能往唐土也。

問。明惠房ハ何所ニ生御候哉。

答。明惠房高弁上生都率内院御。努力ノ不審ニハ不可

思也。近来真実出離得脱御人、此外ニハ無也。

問。解脫房何所生御候哉。

答。解脫房トハ誰人乎。

申云。少納言已講貞慶ト申シ、法相宗碩徳是也。

答。惣不知之。凡ハ後來ナレトモ更解力アル輩ハ、如然

事分明弁之、我ハ学文ニ疎ナリシ故、不知之事多也。聖徳太子之守屋大臣ヲ責サセ給ヒシ事跡ノ世俗事ハ、不忘也云々。

問。近来念仏者其数尤多、皆出離得脱乎。否。

答。誹謗正法者、争可出離乎、皆墮惡道也。惣無厭離穢

土之心、何往生仏国土乎。

問。法然房ハ生何所乎。

答。墮無間地獄リ。

問。善念房ハ可生何所乎。

答。同可墮無間地獄也。

問。性信房可生何所乎。

答。畜生道ニ不墮スハ、魔道ニヤ墮スラン。

問。善念房与性信房者、大旨同見ナルニ、何不生一処乎。

答。二見雖同、於性信房者、信具言少故、徒衆不多、至

善念房、人皆信之、徒衆極多、謗法罪重、故墮アヒ

獄也。

これは末尾に近い部分に現われる箇所、五月二十三日から二十八日に至る間三度にわたって交わされた問答の多分三度目の部分であろうと思われる。この出来ごとは、道家が創建した東福寺の初代住持・聖一國師円爾(一一〇二—一一八〇)の年譜や同国師に師事した無住(一一三六—一一三二)

の『沙石集』(巻十)の中でも言及されている。

二

では、この問答の筆録を残した慶政上人とはいかなる人物であったのであろうか。慶政の出自に関してこれまで不明らになったところは、凡そ次のごとくである。

慶政は九条兼実(一一四九—一二〇七)の孫・道家の兄に当り、十八歳の時父良経を失い、十九歳の時、祖父兼実は歿している。兼実は晩年法然に帰依し、女の宜秋門院任子と共に法然から屢々受戒したことが知られており、法然の四国配流に際しては兼実の少なからざる配慮があったことと思われる。親鸞によれば法然の名著『選択本願念仏集』は兼実の要請によって著わされるに至った^②という。

証月房慶政(照月あるいは勝月と書き表わされることもあった)は文治五年(一一八九)に生まれ、文永五年(一二六八)十月六日に八十歳で寂した。「比良山古人靈託」の猪熊本の勘注によれば、慶政は幼時に誤って取り落されて背骨が出て了うという傷害のため出家するに至った^③という。慶政の出自に関する史料が欠如しているため慶政の伝記の詳細は不明であるが、著書や書写本等からの断片的なデータでその大概が知られるにすぎない。法系に関しては園城寺

(の能舜〔三井統燈記〕あるいは慶範〔園城寺伝法灌頂血脈〕の弟子であるとされているので天台宗寺門派の僧であると見られる。また「東寺真言血脈」中には行慈の六人の弟子の一人として、明恵房高弁と共に名を列ねているところを見ると、後年東密とも結縁していることが知られる。明恵と慶政は共に真言の行者として九条家とは縁が深く、兼実の死去の前年、兼実の請に応じて明恵が月輪殿で病氣平癒のための宝楼閣供を行った事実や、道家が明恵の晩年十八年間明恵に師事した事実を思い合わせると、慶政が直弟道家の病氣平癒のために月輪殿に赴き、偶々これが「比良山古人靈託」なる筆録誕生の契機をなし、一本が道家にも贈られるに至ったことは一層興味深い。明恵との交流は、「新千載和歌集」(八七四・八七五)、「統古今和歌集」(一一四九〇)、「明恵上人歌集」(一一五・一一六)に収められている歌などによってもその親密さの程が伺われる。また慶政は明恵・貞慶らと同じく積尊並びに仏蹟を慕う気持をもっていたらしく、恐らくこの心が動機となって中国(宋)に迄足を運んでいる。それは建保五年(一二二七)、二十九歳の時のことで、凡そ一年間位在宋の後帰国したと見られる。しかし渡宋はしたもののが天台山や五台山等には赴かず、泉州・福州等を訪れたのみであった。渡宋中の事績として知

られていることに二つあり、その一つは泉州で南蛮人に会いペルシャ文字の仏の名号を書かせて、それを梅尾の明恵に送ったことと、もう一つは、福州の東禪寺等覺院や開元禪寺を訪れ、当時行われていた宋版一切經(福州版)の補刻事業に淨財を喜捨し、その經典を後に我が国に將來していることである。慶政は建保七年(一二二九)正月に西山の峯の草庵で『統本朝往生伝』や『拾遺往生伝』を書写していることが確かめられているので、宋からの帰朝は建保六年(一二二八)中であると推測される。

慶政の著わした『法華山寺縁起』によると彼は承元二年(一二〇八)二十歳の時、西山に庵を結んで隠棲している。この庵は峯堂と呼ばれ、後に嘉祿二年(一二二六)または三年に法華山寺をその場所に創建している。彼はその他、後年、法性寺の塔頭寺院の一つ、一音院をも創建している。慶政の著作は数多く知られており、上記の『法華山寺縁起』(二卷)の他、『振鈴寺縁起』(一卷)、『三井寺興乘院等事』(二通)、『金堂本仏修治記』(二卷)、『関寺観音堂縁起』、『大師御作靈像日記』、『漂到流球国記』(二卷)、『高野三股記』(二通)、『証月上人渡唐日記』(佚書)等があり、また『閑居の友』の著者であることが、ほぼ確かめられている。その他、往生伝や諸寺縁起類等の書写も多く遺されている。

三

慶政と明恵は思想的にかなり接近したのが見られ、同時代人の貞慶と並んで一生不犯の持律者としての生き方に共通したものが認められる。慶政は宋で南山大師の『四分律行事抄』への喜捨を行った事蹟が知られている。また国内においては何時の頃から明恵の著述の一つたる『仏光観略次第』の書写を行っている。慶政は台密・東密に通ずる真言の行者であったと同時に、後高倉院の皇女・式乾門院利子、その妹君の安嘉門院邦子ら院の女房との交際もあり、和歌の道にも通暁していた。著書の一つと見られる『閑居の友』は、慶政が書写している往生伝や諸種の仏典等の該博な知識と識見が裏打ちされている。また佚書『観音験記』、十一面観音を本尊とする振鈴寺の縁起、如意輪観音の伝来などを記した『関寺観音堂縁起』等の著述を残していることは、南都仏教通有の釈尊思慕と並んで、観音信仰者でもあったことを偲ばせる。

慶政の承久の変などにおける政治的立場は、九条家の兼実以来の親関東派の色合いが濃く、このことは実弟道家の子の頼経が第一代の摂家將軍として鎌倉に迎えられたことにも深いつながりをもっている。鎌倉幕府を中心とする関

東の状況には九条家の人として並々ならぬ関心と知識を持ち合わせていたことは確かである。

慶政が筆録した靈託の主たる内容の一つは天狗界の様子であるが、鎌倉時代は日本においては天狗の最も活躍する時代であると言われる。そして十二世紀中葉にこの靈託ほど天狗に関して具体的に記している史料は他に例を見ないと言われている^④。中国の文献においては、『史記』(二十七・天官書第五)や『漢書』に夙に見られるが、ある種の彗星を天狗と称したり『漢書』卷二十六・天文志第六)、また天狗はある種の獣と見られたりした(『山海経』中の西海経)らしい^⑤。日本の文献には『日本書紀』(舒明天皇九年・六三七の条)に早くも見られるが、天狗の名は平安時代に入ると『宇津保物語』(俊蔭の巻)に初めて現われる。その他、平安・鎌倉期を通じ南北朝・室町時代の諸文献に亘ってしきりに現われる。すなわち『源氏物語』(夢の浮橋の巻)、『今昔物語』(卷二十、第一―第七、第九、第十一―十二)、『十訓抄』(卷一第二)、『榮花物語』(卷三十六)、『古今著聞集』(卷十七・変化第廿七)、『保元物語』(卷下)、頼長の『臺記』(久寿二年八月二十七日条)、『平家物語』(第二本二・法皇御灌頂事)、『源平盛衰記』(卷八、卷十二)、『吾妻鏡』(文治元年十一月十五日条)、『明月記』(建久七年「一九六」)六月二十三日条、安

貞元年(一二二七)七月十一日条、『太平記』(卷十)、『春日権現験記繪』(第四卷)、『天狗草紙』、『太平記』等牧字にいとまない程である。殊に永仁四年(一二九六)成立の『天狗草紙』は、仏教各宗の僧侶の倭慢の姿を天狗に擬して書き敵しい批判が裏付けとなっている。主として南都(東大寺・興福寺)北嶺(延暦寺・三井寺)の確執・抗争に活躍した僧兵や、門閥・権勢を誇る僧正・僧都等が鳶天狗の姿で画き出されている。鳶天狗の発展した形と見られるのがよく知られている鼻高天狗で、恐らく伎楽面の迦楼羅からの影響であると思われる^⑥。大天狗に関し愛宕山の太郎房、比良の山の次郎房と並び称されるように、比良山は著名な天狗の棲家とされていたのである。『天狗草紙』の作者は「叡山天台関係の学僧に類する人物」であったと推定されることや、『天狗草紙』七卷中延暦寺や三井寺が主要な内容となしていることを勘考すれば、「比良山古人靈託」は『天狗草紙』よりも半世紀程前に記されているが、時代と言いつ場所と言いつ寺門派の僧であった慶政との思想的つながりは決して偶然であったとは思えぬふしがある。

四

「比良山古人靈託」に出てくる法然は浄土宗独立の大事

を為し遂げた法然房源空であることは些も疑いを挟む余地はない。しかし、法然の次に当然親鸞の名が挙げられることが予想されるところ、親鸞の名は出されず、法然にすぐ続いて善念・性信と二人の名が列挙されていることに注目せしめられる。これら二人は親鸞の門弟の中の善念・性信を指すものと見て間違いないものであろうか。筆者にはやはり間違いないと思われるので、次下にそのように推定されうる幾つかの視点を指摘して大方の御教示を仰ぎたいと思う。

先づ法然のすぐ次に親鸞の名が挙げられずに善然・性信と続く理由についてであるが、この靈託の下された延応元年（一二三九）という年は、法然滅後二十七年目に当り、法然よりは四十歳年下であった親鸞が六十七歳の年に当る。親鸞が関東での二十年に及ぶ生活に終止符を打って帰洛したのは六十三歳の頃と推定されているので、親鸞にとっては帰洛後四年ほど経た年に当たっている。親鸞が帰洛後直ちに住った場所は五条西洞院であったであろう。親鸞はこの地に、建長七年十二月十日、八十三歳の時火災に遭って、三条富小路の舎弟尋有の善法房に移居するまで、住んでいたことと思われる。三十五歳の時師の法然の四国流罪と時を同じくして僧位を奪われ越後に配流の身となり、四年程

して救免の身となっていたとは言え、元罪人の汚名を被った身として親鸞は帰洛後も表立った社会的活動は一切することなく、慎ましやかに五条西洞院に蟄居して著作活動に専念していたことと思われる。このため当時の世評に上るとききことは全くせず、いわば洛内のまっ只中に隠棲の形をとっていたに違いない。もしこの頃念仏者の社会的活動があったとすれば、法然の教えの流れを汲む何人かの人次か、親鸞の直弟らであったに相違ない。その直弟が、善念・性信であった可能性は無きにしもあらずと思われる。因みにこの延応元年という年には、善念は三十九歳、性信は五十二歳であったと思われる。この年、靈託を筆録した慶政は五十歳であったので、慶政は性信よりも二歳年下、つまりほぼ同年位の活躍盛りであったということになる。またこの年は六十歳で歿した明恵の死後七年目に当っており、この年の三月には『選択集』が刊行されている。その前年の暦仁元年に聖光房弁長や勢観房源智が相ついで歿しているものの、この年には鎌倉大仏（阿弥陀仏坐像）が成っている。そしてこの頃幕府の専修念仏禁止の気運や叡山の専修念仏弾圧は続いていたが、親鸞が円熟した思想を文字に結晶させて著作活動に没頭していた時期に当たっていた。したがって親鸞の名が当時の世上に全く知られずに

いたとしても、これは至極当然のことであつた。しかし、このことは、必ずしも親鸞の精神的影響を蒙つた弟子たちの社会的活動が皆無であつたということの意味するものではないであらう。

五

次にこの靈託そのものの信憑性についてであるが、一体どの程度理性的判断にたえうるものか、あるいは客観的事実と見做しうるかが根本的な問題とならう。凡そ五十の問答のうち、問いの部分は少くとも筆録者慶政の思想の反映と見てよいであらう。しかし問題は比良山古人の靈と名乗る天狗の託宣はどの程度まともに信用するに足るものであらうか。この靈託の内容に関しては、書陵部本の解説(三—五頁)によれば、一番多く頁数が費されているのは、当時の人々の消息で、死者についてはその後生のありさま、生存中で現に活躍しつつある人たちに関しては将来の運命や生処の予言である。この予言については、その後の實際の成りゆきと比較してみると、殆んど當っていない。

例えば、入道殿と呼ばれている九条道家〔嘉禎四年(一二三八)——この靈託のあつた前年——二月廿四日慶政に受戒、同四月に出家〕への予言は「六月と十月を慎しめば七

十余歳まで生きる」とあるが、實際は、道家は建長四年(一二五二)六十歳で薨去した。してみると、この両月は慎しみが足りなかつたため早逝したのであらうか。また「別事なし」と言われた道家の息・関東將軍頼経は、實際は五年後の寛元二年(一二四四)將軍職を辞し、翌年出家、同四年京都に送還されている。すると、「別事」とは特別に顯著なできごと——死亡など——を意味するのであらうか。

故人の生処に関しては、明恵については都率天の内院に上生しているので決して不審に思つてはならぬとし、近ごろ本當の意味で出離得脱した人は明恵の外にはないと断言している。しかし、貞慶については天狗は自分(マヤ)は字文に疎いからこのような人は知らぬと告白している。また法然房は無間地獄に墮していると言ひ、善念房は無間地獄に墮するであらうし、性信房は、書陵部本では、畜生道に墮ちなければ、魔道に墮するであらうと言ひ、西田氏藏本の古典文庫本では、畜生道に墮するであらうと予言している。明恵が都率の内院という良い生処に配せられているに反し、法然、善念、性信らは、無間地獄・畜生道・魔道といった類いの悪処に配当せられているのは興味深い。因みに法然に関する問答の直前の問答は

問。近來念仏者其数尤多、皆出離得脱乎。否。

答。誹謗正法者、争可出離乎。皆墮惡道也。物無厭離穢土之心。何往生仏国土乎。

とあって、当時盛んであった念仏者をば誹謗正法の者、厭離穢土の心のないものとぎめつけ、皆惡道に墮するであらうと言ひ、仏国土に往生することなど覺束ないと敵しい判断を下している。法然滅後四半世紀ごろにあたるこの頃、幕府や叡山が躍起になって専修念仏を相次いで禁圧する策を構せねばならなかったほど、一般大衆の間では専修念仏が盛行していたことが行間にも看取できる。と同時に、この予言の背景となっているのは南都・北嶺のいわゆる旧仏教的思考であることも明らかである。この限りでは内容は決して不可解でもなく、また何らの異常も認められない。

『天狗草紙』(三井寺卷・中村庸一郎氏蔵)の詞第四段に

或は一向衆といひて弥陀如来の外の余仏に帰依する人をにくみ神明に参詣するものをそねむ衆生の得脱の因縁さま／＼なれハ即余仏菩薩に因縁ありてかの仏菩薩に対して出離し神明又和光利物の善巧方便なれば即垂迹のみもにして解脱すべししかるを一向弥陀一□に仏限て余行余宗をきらふ事愚癡の至極偏執の深重なるか故に袈裟をハ出家の法衣なりとてこれを著せすして愁にすかたは僧形なりこれをすつへき或は馬衣をきて衣

の装をつけす念仏する時ハ頭をふり肩をゆりておとる事野馬のことしさはかしき事山猿にことならす男女根をかくす事なく食物をつかみくひ不当をこのむありさま併畜生道の業因とみる……

という伴りが見られる。これは靈託よりも半世紀ほど後のもので一遍の徒を一向衆の輩の代表と見ている点時代のずれを感じさせるが、天台宗から見た一向専修の徒の描写としては法然時代の徒衆とさして変りはなかったに違いない。なりふり構わぬ念仏の大衆の行業をはしたない振舞いと蔑視して畜生道に配している点などを見ると、性信の処で畜生道という未来の生処の予言をしていることも根拠のないことではないことが分る。ましてその首領格の法然が無間地獄行である理由も肯ける。善念も法然と同処に墮するであらうということとは、法然に匹敵しうる社会的影響力の持主たることを認められていた念仏の唱道者ということになるうか。

このようにこの靈告の現世の人に対する未来の世のあり方に関しては、史的事実として当らぬ場合が多々あるにせよ、現に活躍中あるいは死去して間もない人びとの死後赴く境界の予告に関しては、多分に旧仏教界の思想が反映していることは明らかである。したがって延応元年を中心と

する当代の現実をむしる深い係わりをもっていると考えることができるとであろう。

久保田淳氏は「以上はすべて比良山の天狗の靈託ではあるけれども、そこに筆録者慶政の意識の反映を認めないわけにはゆかない」という風に見ておられるが、筆者は慶政を含む当代の旧仏教的思考、わけても出自の尊貴や僧位・学識・法験を誇る傲慢心を厭い、陰徳を重んじ、内省的であるべき僧たらんとする生き方をよしとする聖道門的な思想が反映していると見る。廿一歳の女性がいわば神がかり状態で慶政の問いに答えた託宣であるという性格を考え合わせると、慶政自身の思想・感情のみを盛りこんだ著作と同列には到底考えられない。しかし内容からして全く創作のかけらもないとも言い切れぬところにこの靈託の特性があると見えよう。以上のようなことから推求して、筆者は善念・性信は親鸞門下のそれらに違いなく見て差支えあるまいと思う。

六

靈託のテキストでは、法然のところでは「生何所乎」とあるのに対して、善念・性信の伴りでは「可生何所乎」とあるところを見ると、延応元年には、法然は故人であり、

あとの二人は存命中であることが知られる。親鸞聖人滅後八十一年目に記されたと言われる妙源寺本の「親鸞聖人門侶交名牒」によれば、親鸞の直弟中に善念(常陸奥郡住)、性信(下総国飯沼住)の名が見出される。他に善念という名は顕智の下に一人見られるが、顕智のところののみ「上人面授」とあるので、これは親鸞の孫弟子に違いない。また性信の名は他に如信の下に一人(曾孫弟子)、専信の下に一人(曾孫弟子)、乗念の下に一人(曾孫弟子)の三名あるも、ここでの性信は飯沼の性信であることは確かである。試みに生存年代を検証すれば、延応元年(一二三九)には善念(一二〇一―一二八五)は三十九歳、性信(一一八七―一二七五)は五十二歳の盛年に当り、共に宗教界の指導的人物として一人前の社会的活動を行っていたとしても何ら不思議でない年齢に相当している。善念は常陸国笠間の人、もと相模の三浦源氏の一族で、三浦三郎義重という武士であったが、十三歳の時、父の実忠が建暦二年(一二二二)和田義盛の乱に与して討死したため、常陸に逃れ、建保四年(一二二六)、十六歳の折、鹿島明神に赴き祈願した帰り偶々親鸞に出会い、当時小島の草庵に住っていた関東移住直後の親鸞(四十四歳)の弟子となり、善念という法名を授けられたという。弘安八年十月十三日、八十五歳で入寂。常陸水戸の善

重寺の開基で、二十四輩の第十二番目の門弟である。性信は二十四輩の第一番目の報恩寺の開基で横曾根門徒の中心者として知られている。鹿島神官の宮司大中臣宗基の嫡男として生まれたが、幼時から性質は粗暴で人々から悪五郎と呼ばれた。十八歳の時上洛して、偶々法然の説法を吉水で聞き、菩提心を起し、本願の教えに帰したが、師自身が老齡の故親鸞の門弟となるよう師から薦められ、親鸞の弟子となり、性信の名を与えられた。親鸞に生涯仕え、『教行信証』の草稿本を伝持した。親鸞の性信並びに横曾根門徒に宛てた消息は六通ほど遺されている。性信は建治元年(一二七五)七月十七日に八十九歳で寂している。

諸種の史料に照らしても、善念と性信の両名が並び現われるところは殆んどないが、内容や表現に疑いなしとしなると見られている江戸時代の五天良空の著わした『高田開山親鸞聖人正統伝』中に二、三の記述のあるのが注意される。この書は高田派が親鸞の教えの正統を継承しているとの自負のもとに書かれており、他派他流を見下した書きぶりがなされているため、東西本願寺教団から次々と駁論され、玄智の『非正統伝』などが書かれたが、史実に関しては、真仏と顕智が著わしたと言われる「本伝」を中心として、順信の「下野伝」、「正中記」、「至徳記」、「五代記」、

存覚の「四卷伝」等、下野の高田専修寺宝庫に伝来したと称する資料を用いているので、かなり史実に近いと思われるデータが含まれていると言えよう。

『正統伝』(巻六)の親鸞六十歳の段に次のような件りがある。

同年「貞永元年(一二三二)」八月上旬第七日、聖人下野国高田ヲ立チ出デ、華洛ニ赴キタマフ、供奉ハ顯智房、專信房、伊達善念房、飯沼性信房四人ナリ、真仏、專空兩人モ、武蔵国矢口渡マデ送リタマフ、已上本伝ここに善念・性信の順で二人の名が揃って挙げられている。性信は翌々年の八月まで親鸞に供奉して箱根で師を見送り一先ず関東に帰っているが、善念は伊勢に暫く滞在した後、六十三歳で帰洛した親鸞の一行に嘉禎元年(一二三五)八月、合流している。善然のこの頃の足どりについては、同じく『正統伝』(巻六)の六十三歳の段に、

伊達ノ善然房ハ、伊勢ノ川曲カスミニノコシ置タマヒケルガ、同月十一日ニ京ヘ参レリ、コノ時、後九条殿ヨリ五条西洞院ノ御所ヲ能クシツラヒテ、昔ノ好ミモ浅カラズ、且ハ玉日姫君ノ御菩提ニモ侍レバ、此所ニ移住ミタマヘト、累ニ仰セラレシカバ、九月二十日アマリニ、西洞院ニ移リタマヒキ、是マデ、顯智房、專信房、善然

房三人共ニアリテ給事ス、同月ノ末ニ、聖人仰ラレテ言ク、今ハ都ニモ居ナジミタリ、專信ハ東国ニ下リ、真仏、性信ニ云ヲキタルコトアリ、コ、ロヲ合セテ、念仏弘通アルベシ、善然モ伊勢ニ歸リ、未熟ノ者ドモヲ教勸アレ、都ニハ頭智一人ニテ足リヌ、是モアトヨリ伊勢ニツカハスベシト云云、スナハチ、十月二日、專信房、善然房、御暇タマヒテ田舎ニ下ラレケル、……とある。これによれば、善然は一時布教のため伊勢に残っていたが、親鸞帰洛と時を同じくして入洛、暫く師のもとに滞在の後伊勢に下ったという。しかし、その後三十年近くの間京都の師のもとへは度々往復したであろうことは考えられる。善然に関しては他の事績は資料乏しく不明である。

七

性信の入洛で間違いないと思われる年は建長七年（二二五五）の春で、親鸞八十三歳、性信六十七歳の時のことであつた。『御消息集』（五）にある慈信房善鸞宛の親鸞の消息中に「性信房には、春のぼりて候ひしに、……」の言葉が見られるのが唯一の確証であろう。あとはずっと後世、江戸時代の『二十四輩次第記』（元禄以前のもの）中にある

二つの時期、すなわち性信十八歳の時の法然・親鸞との出会いと得度の年〔元久元年（二二〇四）〕と、師の帰洛後間もなく上洛して真影を授けた事〔嘉禎元年（二二三五）〕が伝説の上での手がかりであるにすぎない。前者は親鸞が師法然から『選択集』の付属をうける前年にあたる吉水時代である。また大和来迎寺の開基で西山深草派の静見（二二二一—一八三）の著わした『法水分流記』の大谷門徒（号一向宗）の項には、親鸞の下の法脈に三流を分ち、如信・性信・真仏とあり、性信に続く法系が願性・善明・愚咄・聖空・円空とある。この中聖空が大和の人で吉野滝上寺の開基となっていることは、性信が法然に初めて出会う直前に熊野詣でをしたという『二十四輩次第記』の記述と思い合わせる。性信と山城・大和・紀井にまたがる地域との何らかのつながりを憶測せしめられる。ことに『法水分流記』が最古の法然門下の法系図であることを勘考すれば、静見の知り及んだ性信の親鸞門下での位置づけが、如信に次ぎ真仏に先立っており、他の系統が全く省かれていたことからして、性信が大きな比重を占めていたことを示唆している。この図がいかにして静見によって示されたかの背景に関し何らかの手がかりが得られるならば、なぜ性信の名を慶政が知り及んでいたかの問題を解くヒントの一つとなるであ

ろう。

さきの『正統伝』の親鸞帰洛直後の記述中、西洞院に親鸞を住わせたのは「後九条殿」とあるが、これは慶政より四歳年下だった道家であったであろう。道家の父良経は夙に建永元年（一一〇六）三十八歳の若さで夭折している。慶政は弟の道家から祖父兼実が晩年帰依した法然の門下の動静は常に聞き及んでいたことであろう。況してや祖父の弟慈円の下で得度したという親鸞には少なからぬ関心を懐いていたであろうことが考えられる。しかも靈託のできごとは親鸞の帰洛後四年目のできごとである点は殊に注意されてよい。伝説によれば、その帰洛の年に性信は関東から親鸞に会いに入洛しており、かつ真影を授けているのである。このできごとが慶政の耳に入っていないことは、よもやあるまいとすら思われる。善鸞訴訟の時、鎌倉の將軍は道家の实子頼経であったことを考え合わせると、性信が親鸞の門弟たちに優れた成果を納め、師からも感謝された事實は、この九条家が関東と京都を結ぶ紐帯になっていた事と関連があるのではあるまいか。靈託の時点（一二三九）では、九条家は下総の三崎庄に荘園を有しており（一一八六）、それから十年ほど後（一二五〇）には常陸の小鶴庄、武蔵の稲毛庄、船木田庄等に荘園を有しており、鎌倉から室町にかけ

て九条家は上総菅生庄にも荘園を有していたほど関東との関連は密接であった。靈託中の善念・性信は親鸞門下の二人であったと推察することは以上のような視点から決して無理ではなからうと思われる。そして京都と関東にまたがる九条家の政治・軍事・経済上の人的交流等の重層的な連がりを見すえながら、靈託のできごと当時の京洛における法然門下の活躍の模様と、山城・大和・紀井にかけての念仏者の動静を一層明らかにすることによって当時の善念・性信らの位置づけをより明確にしうるのではなからうかと考える。

註

- ① 「慶政筆録『比良山古人靈託』について——特に法然、善念・性信の墮獄説のこと——」『柳田良洪博士頌寿記念論集』（高僧伝の研究・昭四八・六・八刊）三四九—三五七頁。
- ② 「選択本願念仏集」者・依「禅定博陸（月輪殿兼実）法名圓照（ママ）」之教命「所（道家）令撰集也。」『親鸞聖人全集』教行信証②、三八二頁。
- ③ 「証月上人ノ名、峯殿ノ兄ナリ、乳子取落ニ依テ背骨出ル故ニ釈門ニ入ル、一音院・法華山寺字峯ノ堂等ノ祖師」（天理図書館本）。
- ④ 「比良山古人靈託」解題 三頁。
- ⑤ 岡見正雄「天狗説話展覧——天狗草紙の周辺——」『日本絵巻物全集』第二十七卷、天狗草紙・是害坊絵・解説 二四

頁。

⑥ 右に同じ。

⑦ 同三十六頁 下段。

⑧ 同九頁 下段。

⑨ 「魔界に堕ちた人々——『比良山古人靈託』とその周辺——」『文学』岩波書店・昭・四三・十月、卷第三十六卷・

四三頁下。

⑩ 『真宗史料集成』第七卷 解題 三一頁上。

⑪ 出雲隆編『鎌倉武家事典』 昭五三 青蛙書房刊 五九八

頁。

⑫ 安田元久編『荘園』 昭五二 近藤出版社刊 二六〇頁。

(本学非常勤講師 仏教学)